

# 心づかいのありがたさ

伯耆町立岸本中学校 三年 柳 遥貴

水泳というのは一人で戦ういわゆる個人競技である。でもそれは最後の瞬間だけであって、本当は沢山の人の力で成し得ていると改めて思うことが、中国中学大会であったので、それについて書くと思う。

僕は全中標準を切る事が出来、今はただひたすら決勝に残る事を目標にやっている。県総体は通過点であり、中中は全中でベストを出すための大事なポイントになると考えていた。水泳は一発勝負なので、その約一分にベストパフォーマンスが出来るように、毎日地味な練習を繰り返す。たった二十五メートルを行ったり来たりを数時間、一日六〇〇メートル泳ぐ。手のかき、キックは数センチの単位で修正していく。それを毎日、見ていてくれるのはコーチで、細かな指導をしてくれる。テスト中も猛暑でも毎日休まず練習を重ねていく。自分ではその大量の練習の中の一本をいかに丁寧に泳ぐかが大事だと思っている。

全中にピークを合わすため、中中は毎回、無調整で、練習がきついさなかに行く事になる。僕はその疲労がたまった状態でベストを出し二冠そして二連覇すると心に決めていた。全国の強い人が沢山来る全中の本番までに自信が欲しかったからだ。

しかし二年生に急成長した子がいた。中中で僕に勝つと宣言しているのも噂で聞いていた。僕は正直怖かった。何より悪いイメージで全中本番にのぞみたくなかった。

そんな中、レース決勝がきた。スタートするとピッタリとついてきた。焦って動きが空回りして思うように動けない。気がつくとも〇・一秒差で負けていた。何が起きたのかわからなかったが、一位の二年に「おめでとう。」と歯をくいしばっていった。悔しすぎて何も考えられないまま表彰式を終えた。やり直したいもう一度泳ぎたい、悔しくて苦しいまま半日何とか普通をよそ

おつてすごした。

僕を引率してくれた川原先生がバスを降りた後、話してくれた。

「相手のペースが上手かったけど、柳君はレースを自分で進めたら良いと思うよ。」

川原先生はテニス部の先生なのに、僕一人のために中中に来てくれていた。先生はもと水泳選手で、よくわかってくれていた事に驚いた。ありがたかった。

その後、今は他校の先生になっている野嶋くんにあいさつに行った。野嶋くんは現役スイマーでもあるし、学生時代も僕はギリギリ知っている。県記録を今でも沢山もつ凄い人だ。皆には「先生」でも僕は先生をしている姿を知らないで、水泳アスリートで大先輩というイメージが強い。今もいつも話す時緊張してしまう。野嶋くんは

「いいか。焦るな。勝てるレースを今日落としたのは焦りだよ。全中は絶対に緊張する。でも信じんといけんよ。」

と僕に言った。そして細かな浮き上がりの一かき目の指導までしてくれて、頑張れよ、と笑って言うてくれた。

二人とも、とても細かな所まで見ていてくれていた。二人の言葉を聞いていたら、心の奥でぐっとためていた苦しい気持ちが少し楽になった。その言葉を何回も思い返しているうちに、今回の負けは全中の前にやっておいて良かったとさえ思えてきた。あと十日間は練習できる。細かい所も直せるし、落ちついてレースすれば良いのだ。僕は自分のレースを展開するのは得意だ。忘れる所だった。

今、合宿を終え、全中まで三日とせまった。今日、これを書いている。僕一人で戦うのではないという事を教えてくれた先生二人、いつも僕を指導してくれるコーチに、絶対に良い報告がしたい。そう思っている。僕は目標としている決勝の入場は岸中の体操服ですと決めている。

この作文を提出する時、結果は出ているけど、それよりも、一人で戦うレースは、沢山の支えがあつてできていることを教えてくれた事に感謝したい。